

多和田葉子「犬婿入り」論

—ジェンダー的規範の解体を中心に—

松崎美恵子*

(e-mail : mimidae@naver.com)

<目次>

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 禁忌とされる性的マイノリティ |
| 2. ジェンダー的規範から解放された人々 | 5. おわりに |
| 3. 制度的結婚と家族の解体 | |

キーワード：ジェンダー(Gender)、制度的結婚(Systematic marriage)、制度的家族(Systematic family)、禁忌(Taboo)、性的マイノリティ(Sexual minority)

1. はじめに

1992年下半期第108回芥川賞を受賞した多和田葉子(以下、多和田とする)の「犬婿入り」(初出:「群像」1992年12月号)は、そのタイトルと同様の昔話「犬婿入り」が作中で主人公によって語られるとともに、その民話的要素が組み込まれている作品である。

「犬婿入り」の小説の舞台は北区と南区の二つの地区を持つ町とされ、前者は30年ほど前から駅を中心に発達し団地が建てられた新興住宅地、後者は多摩川沿いに位置し、古くから栄えていたが現在では人のあまり訪れない寂れた地域だと語り手によって説明されている。疋田雅昭は、多摩川沿いに「堅穴式住居の跡」があり「小さな宿場町として栄えたこともある」という町の歴史や1960年代の「カドミウム米」問題に関する記述¹⁾をもとに、

* 済州大学 日語日文学科、講師、日本現代文学専攻

1) 多和田葉子(1993A)『犬婿入り』、講談社、pp.98-99. 「そもそもこの町には北区と南区のふたつの地区があって、北区は駅を中心に鉄道沿いに発達した新興住宅地、南区は多摩川沿いの古くから栄えていた地域で、今では同じ多摩に住んでいても南区の存在すら知らない人が多いけれども、北区に人が住み始めたのはせいぜい公団住宅ができてからのこと、つまりほんの三十年ばかり前のことで、それに比べて多摩川沿いには、古いことを言えば、堅穴式住居の跡もあり、つまりそのような想像も及ばない大昔から人が暮らしていたわけで、稲作の伝統も古く、

物語の舞台を現在の府中市に相当する地域だと指摘しているが²⁾、多和田自身が小学校入学前に国立市に引越したことを語っている³⁾ことから、作品の舞台は高度経済成長期の人口集中による都心の住宅難を解消するためのベッドタウンとして1950年代後半から多くの団地が建てられ発展してきた府中市、国立市を含む1990年代はじめの東京多摩地区だと考えられる。

主人公は、その南区で子供たちから「キタナラ塾」と呼ばれている学習塾〈キタムラ塾〉を経営する39歳の北川みつこである。ある夏の日、みつこの家に「電報、届きましたか」と言って犬のような振舞いをする飯沼太郎が突然押し掛け、みつこのもとに現れた理由も説明されないまま二人の同居生活が始まり物語は展開していく。「犬婿入り」というタイトルと、主人公みつこによって語られる「犬婿入り」の話により、ただちに「つる女房」のような日本の民話における異類婚姻譚を読者は連想させられる。小説の中にも犬のように振る舞う太郎だけでなく、人間とは思えないような俊敏な動きをし「狐のような感じ」と形容される太郎の妻・良子という動物的なイメージをもつ二人が登場するなど、奇妙な民話的雰囲気とところどころで醸し出されている。また、小説では身元のわからない主人公のみつこ、そこに突然出現する太郎と太郎の人格が変わるきっかけとなった野犬に襲われる事件、太郎と良子の語る「電報」など、不可解な要素が多く組み込まれており、先行研究ではそのような不明瞭さについて多くの言及がなされてきた。

1992年の「犬婿入り」発表直後の『群像』の「創作合評」では、三浦雅士の「細部は非常に明瞭だけれども、全体がフワッとした雲に包まれたような文体が印象的で、それ

カドミウム米の出た六〇年代までは堂々と米を作っていたし、また〈日本橋から八里〉と刻まれた道標の立っているあたりは、小さな宿場町として栄えたこともある。」*以下、多和田葉子(1993)『犬婿入り』講談社からの引用は頁数のみ記載する。

- 2) 正田雅昭(2006)「欲望する主婦たち もしくは 抑圧される子供たち—多和田葉子『犬婿入り』をめぐって—」『立教大学日本文学』(97)立教大学日本文学会編、pp.163-164。「日本橋」から多摩川方面に延びる国道は、旧甲州街道、その「八里」の「道標」は「府中宿」、現在の府中市に相当する地域である。ここは、内藤新宿からも六里余りという好位置にあり、本陣、脇本陣、問屋、旅籠屋、木賃宿、飯盛旅籠の揃った宿場であった。また、近在の村々の人々が買い出しや行楽に出かける盛り場としてもにぎわった。一九六〇年代後半は、日本列島各地で公害の問題が大きくクローズアップされていった時であったが、一九七〇年代の二月二日に多摩川支流の平井川から北大久野川(日の出村)でハヤなどが二〇〇〇匹が浮き上がり、さらに五月三日に多摩川(秋多川)でフナなど三〇〇〇匹が浮きあがった。東京都は七月より多摩川で自然調査を開始し、その結果、府中市日新町付近の水田地帯と用水の土壌からカドミウムが検出されたのが一月一三日、四日後さらに上流の府中用水の水路調査が実施され、この地のカドミウム汚染は全国的に知られるところとなった」
- 3) 多和田葉子(1993B)「〈生い立ち〉という虚構」『文学界』47(3)、文藝春秋、pp.32-34参考。多和田はこのエッセイの中で東京中野区での幼少の頃の記憶に続き、小学校入学前に国立市の一戸建てに引越したことを以下のように語っている。「国立に越したのは、小学校に入学する直前だったように思う。下見に行った時に見た建ったばかりでまだ人の入っていない団地の群れは不気味だった。」

がこの小説の特徴といっているのではないか」⁴⁾という所感をはじめ、川村二郎も山本道子もその不明瞭さそのものを小説の特徴として捉えている。⁵⁾また、岡部隆志は「多和田葉子『犬婿入り』論—消費される民話—」(2004)の中で、「犬婿入り」を「わきでる」様態を使った作品だとし、多和田にとって重要だったのは民話が無意識から「わきでる」ものであり、作品から作者を消去し「わきでる」物語として装おうとしたと指摘している。⁶⁾

「犬婿入り」に関する論評はその後も発表されてきた。舞台のモデルとなった多摩地域の一つ国立市と「犬婿入り」の関係性に着目した泉谷瞬は、かつての国立町が1951年に文教地区に指定された歴史から、北区と南区という地理的な分けを衛生観念と性道徳に対する意識の差として捉えた。北区の住人たちが衛生観念と性道徳において教育や権威に教化されている人々であるのに対し、南区に住むみつこは基本的に北区の人々とは対極になる人物だと指摘している。⁷⁾また、民話的文体と排泄物と性的接触に関わる身体という要素を語彙という観点から考察を行なった長谷川美緒は、小説の異質性が言葉によって現出され共同所有物としての言語の秩序を揺るがしているとし、その異質性を自由な言葉の生命力として捉えている。⁸⁾このように「犬婿入り」は1992年に発表されて以来、今

-
- 4) 川村二郎・山本道子・三浦雅士(1993)「創作合評205「犬婿入り」多和田葉子」『群像』48(1)講談社、p.536。
- 5) 上掲書、川村二郎・山本道子・三浦雅士(1993)pp.536-542参考。本書評論の中で川村は小説が「甲子夜話」や「耳袋」のような江戸時代の随筆に類似している点を指摘しながら「僕は一言でいえば、おもしろく読んだのですけれども、ただ、そのおもしろさが何だろうというと、かなりいいにくいわけですね」と述べている。また、山本も作中の長い文章を古典文学的なスタイルとして捉えつつ「読む方が感銘を受けたり、考え込んだり、同調したり、そういうふうな訴え方を必要としない小説じゃないか」とし小説の最後も特に結論はないと語っている。
- 6) 岡部隆志(2004)「多和田葉子『犬婿入り』論—消費される民話—」『國學院雑誌』105(11)國學院大学、p.506。「(前略)民話とは人々の無意識に貯えられた幻想の言語的顕現である、と言えるからで、仮に、民話を意図的に用いて何かを表現したかった、などと述べるなら、そこではすでに民話は、作者が作品という構築する際のただの材料の一つに過ぎなくなっている。問題は、素材としての民話でなく、あるいは、その構造といったものではなく、作者多和田にとって重要だったのは、民話が、無意識から「わきでる」ものだということではないか。民話とは、その本質において個人ではなく人々(社会)の無意識の顕現である。民話的手法をとることにおいて、少なくとも、言語表現の担い手としての個人を隠すことができる。そうすることで、作品から、作者そのものを消去し、何処から「わきでる」物語として装うとしたということである。」
- 7) 泉谷瞬(2012)「教化される感覚—多和田葉子「犬婿入り」論—」『昭和文学研究』(65)昭和文学会編集委員会編、pp.86-92参考。泉谷は本稿の中で、1951年に東京都市計画審議会より旧国立町が文教地区に指定されて以来環境美化を求めた文教地区住人の性質や風俗営業が規制されるようになった状況を性的な出来事や暗示を隠蔽する「北区」として極端に設定していると指摘している。
- 8) 長谷川美緒(2018)「テキストを揺さぶる言葉:多和田葉子「犬婿入り」における異質性について」『早稲田現代文芸研究』(8)早稲田文芸・ジャーナリズム学会、pp.145-155参考。本論文にて長谷川は身体の接触を表す直接的な語彙や、その接触を喚起する「犬婿入り」の民話、太郎とみつこが所属を持たない異質性を帯びた登場人物となることが共同所有物としての言語の秩序を揺るがしているとした上で、二人が町を離れるという物語の結末については「新たな物語へ続く可能性と原動力もまた感じられる」と肯定的に捉え、次のように結論付けている。「小説「犬婿入り」は、固定化された観念から逃れてどこまでも外へ向かう、自由な言葉の生命力を、民

日まで継続的に研究対象とされてきた作品であるといえる。先行研究で概ね着目されてきたのは、その明確にできない異質性であった。しかし、多和田が小説に描き出そうとしたのは社会における異質性の存在だったのであろうか。

前述した通り「犬婿入り」の舞台は東京多摩地区と推測でき、1990年代という時代と東京多摩地区という地理的な設定がなされていることから、日本の民話的な要素を意識しそれらをまじえながらも、小説自体は現代社会を描いたものだと考えられる。他にもなく高度経済成長期に建てられた多摩地区のニュータウンが舞台として選ばれたことを考慮すると、当時の日本社会のごく平均的な家庭、あるいは多数を占める一般的家庭の人々の姿、つまり疋田の言葉を引用するならば「戦後の日本社会の時代様相」⁹⁾が描写されているとも言えるであろう。「犬婿入り」は小説全体の雰囲気や、北区に住む人々の噂によって物語が展開される手法こそ民話的であるものの、そこに描かれているのは古くから民衆によって語り継がれてきた昔話ではなく、作者である多和田の目に映った現代社会なのである。本稿では、主人公みつこをはじめとする登場人物たちとその相互関係を考察し、先行研究で語られてきた小説の中の異質性が現代の日本社会に対する作者の着目点、あるいは意識とどのように連続しているのか論じていく。

2. ジェンダー的規範から解放された人々

「犬婿入り」の冒頭は、7月のある日の午後の団地の風景描写から始まる。団地は前述したように戦後の高度経済成長期に開発された多摩地区と推測でき、その新興住宅地の北区と対照的な活気のない南区に住むみつこは、自宅で〈キタムラ塾〉を開き生計を立てているが、39歳の独身女性であるという以外、明らかにされていることはなく、その人物像は謎に満ちている。みつこに関する詳しい描写は、語り手によって以下のように語られている。

誰でも確実に知っていたのは、北村みつこが三十九歳だという事実で、(中略)みんなみつこの年齢だけはよく知っていたものの、たとえばみつこがこの土地へ来るまで何をしていたのかについては誰も知らず、(中略)白いワンピースを着てマウンテンバイクに乗って現

話の異類から変奏してみせたものといえるだろう。」

- 9) 前掲書、疋田雅昭(2006)、p.164。「具体的な土地を喚起する指標に溢れながらも、物語は、戦後の日本社会の多くの地域に見られた事態を示している。物語に刻印されているのは、具体的な場所ではなく、戦後の日本社会の時代様相なのである。」

れ、その家を十年貸してほしいと頼み込み、やがて聞き入れられて塾を始めたわけだが、どこから現れたのかよく分からないそんな女の願いをあの農家の頑固者の親父が聞き入れたのが近所の人間たちには不思議で、あの女は実は親父の二号だったらしいという噂まででたことがあったが、実際に北村みつこを見てみると、とても〈二号さん〉という柄ではなく、擦り切れたもんべのようなものをはいていて洒落たサングラスをかけ、八重桜の木の下で嬉しそうにポーランド語の小説を読んでいるところなど、どんな育ち方をしたどんな家柄の人間なのか見当がつけにくいし、しかも子供のいない女性の場合、どう分類していいのかわからない三十九歳という中途半端な年齢のせいもあって、噂するのにも疲れてしまい、放任するようになったのを見ても分かるように、近所の人たちは噂にかけては、団地の主婦たちほど根気がなかった。(pp.96-98)

日本人女性であるはずのみつこだが、上記の特徴からは日本人、あるいは女性という一般的なイメージを覆す性質も持ち合わせていることがわかる。家柄も出身地も見当のつかないこのようなみつこは、異質な存在として映る。また、39歳にして未婚であり子供のいない女性であることを理由に、みつこは「どう分類していいのかわからない」存在として捉えられているのである。

ここで語られている「分類」が、北区と南区という地理的設定と重ねられていることが確認できるであろう。南区のみつこの塾に通う子供たちは北区にある新興住宅地の団地に住み、そこから通って来る。作品に登場するみつこと同世代の女性といえば、塾の子供の母親たちであり、彼女たちは高度経済成長期に形成された中流家庭の主婦像の典型だと考えられる。高度経済成長にともなう1950年代からのニュータウン建設は1970年代にかけて発展し、中流サラリーマン家庭が住む団地、夫は「サラリーマン」、妻は「専業主婦」という認識が日本社会において一般的になり当時の女性像はカテゴリー化されていたといえる。鹿野政直は高度経済成長の中、サラリーマン社会の到来により団地が普及し、1960年代に入ると結婚していて子供がいる「主婦」が成人女性の生き方のモデルとなったことを指摘している。10)かつて国立市に居住した多和田も、過去に同級生のほとんどがサラリーマン家庭で団地住いをしてきたことや一戸建てに住む子供が〈普通の家の子〉と呼ばれたことに違和感を感じたことを語っている。11)そのような多和田の経験が物語の設定に影響を

10) 鹿野政直(2004)『現代日本女性史―フェミニズムを軸として』有斐閣、pp.32-35参考。鹿野は本書の中で高度経済成長により日本にサラリーマン社会が到来するとベッドタウンが開発され団地が普及し、団地がサラリーマンとその配偶者としての主婦、その子供から成る核家族、「中流」意識の「城」となったと指摘し、企業社会化は「社員」の対としての「主婦」を浮上させたと論じている。また、当時の「主婦」の定義を「都市のサラリーマンの無業の妻、二人か三人の子どもの母、そして核家族の主婦」としている。

与えたことは推測できるであろう。北区の団地は当時の日本の象徴的かつ典型的な中流家庭のコミュニティーであり、そこに住む母親たちは、主婦という分類に属している女性の表象なのである。北区の団地に住む母親たちと南区の一軒家に住むみつこという設定は、日本社会において典型とされるコミュニティーに住む平均的な女性とそれに属さない者の表象として捉えられるのである。

多和田は「「犬婿入り」について」(1993)の中で、「犬婿入り」を執筆するようになったきっかけをハンブルク大学日本語学科の図書室で「犬婿入の伝承」という論文を目にしたことにあるとし、昔話の「犬婿入り」の妻ではなく夫の方が動物である話に惹かれたことを語っている。¹²⁾そして、昔話の話型を紹介しながら以下のように語っている。

- 一、母親が犬に娘の排便を始末したら嫁にすると約束する。
- 二、娘が他の男に嫁入りすることになると犬が妨害する。
- 三、母親は娘を犬の妻にする。
- 四、ある猟師が犬を殺してその娘を妻にするが、娘は猟師を殺して犬の仇を討つ。

ということで、わたしはこの話の始まりと終りの部分に特に心を動かされた。犬ならば当たり前かもしれないが、愛する女の排便をなめて処理できる能力、しかもそれがごく自然に行なわれるところも良いし、そもそも愛のヒロインの排便が、物語の重要な要素になっているところも良いし、最後に女が、迷いもせずに犬の方を選んで、猟師を殺すところも良い。¹³⁾

昔話における従来の一般的な概念に反する展開に引き付けられている上記の多和田の所感からは、作者のジェンダー的な意識を察することができるであろう。犬である男性が女性に尽くし婿入りしようとする点や、極端ではあるが女性が自分の意思によって決着を付ける

11) 前掲書、多和田葉子(1993B)、pp.33-34。「小学校に入ると、同級生のほとんどが団地に住むサラリーマンの子女で、たまに一戸建ての家に住んでいる子がいると〈普通の家の子〉と呼ばれていた。圧倒的多数が団地に住んでいるのに一戸建てを〈普通〉と呼ぶ感覚というのは今思うと、自分たちが普通ではなくなってしまったことへの記憶の表現であるような気もするし、大人になったら出世して一戸建ての家に住まなければならない、という変な意気込みの表現であるような気もするが、とにかくわたしにとっては、一軒の家が、自分の生まれた、あるいは育った家であるという感じは想像できない。」

12) 多和田葉子(1993C)「「犬婿入り」について」『本』18(5)、講談社、pp.6-7。「二年ほど前、福田晃という人の「犬婿入の伝承」という論文を何気なく手に取った本の中に見つけたのも、この図書館ならではの出来事だった。(中略)わたしは動物が人間と結婚する話には何でも興味があり、狐や貝が女房になる話にも感動したことがあったが、妻ではなく夫の方が動物だという話は、それまでは〈猿婿入り〉くらいしか知らず、しかも猿婿の話は好きになれなかったので、すぐにこの犬婿の話にとびついた」

13) 上掲書、多和田葉子(1993C)、p7.

結末など、昔話の「犬婿入り」では女性が主導的な位置にある点が特徴的である。多和田は同エッセイにて「わたしは、自分の心にうったえかける要素だけを全部寄せ集めて、わたしだけのバリエーションを作った。それが、去年ある小説を書いている途中、突然いきいきと記憶に甦り、ついにその小説を裏から支配して、「犬婿入り」という小説にしてしまった。」¹⁴⁾とも語っており、このことは昔話の中にある要素に対し作者に潜在する問題意識が反応したものと推測できる。専業主婦という典型的な当時の女性像としての北区の母親たちと39歳で独身のみつこが対照的に描かれている点をはじめ、多和田の潜在意識が性的役割、つまりジェンダーに依拠していることは小説において確認できるのである。

ニワトリの糞で作った膏葉を肩に貼り、着古したタンクトップを着るようなみつこは対照的に、真っ白なワイシャツと折り目のついたズボンという清潔な装いをした太郎が、8月のある日みつこのもとに現れる。太郎は直ちにみつこと性的な関係を持ち、みつこの肛門を舐め、その後は手際よく食事の用意と家の掃除に取り掛かる。その日から何の説明もないまま二人の同居生活は始まるが、間もなく太郎の姿は二人の男の子に目撃される。

「北村先生の家の前をね、プールの帰りに通ったらね、男の人が、家の掃除してたよ」
と母親に報告し、
「男の人って、どんな人」
と問い返されると、困って、
「スーパーマンみたいな人。大きくて、恐そうだった。」

(中略)

と言うので、母親は笑ってしまったが、それでは北村先生の甥か何かを上京して来て、家があまりに汚いから、掃除してやっているのだろうか、最近の若者は軟弱だというけれども、清潔好きなところは感心だと思って、

「最近の独身の男性は、独身女性の家の掃除までしてあげるんでしょうかね」

(pp.112-113)

その後、子供の話聞いた母親はみつこの家を掃除する男について隣の棟の母親に話し、市役所のソーシャルワーカーではないかなどと噂が拡がり始める。何気ない上記の親子の会話ではあるが、掃除をしている太郎を「甥」だとし「最近の若者は軟弱だ」という母親の発する言葉からも性的役割に対する認識が見て取れるのである。小説の中では太

14) 前掲書、多和田葉子(1993C)、p.7.

郎がみつこの家で掃除や食事の仕度など、あらゆる家事をこなすことが自然に描かれている。しかし、男性が掃除をすることは、塾の子供の母親の目からすると決して肯定的ではないことがわかるのである。

みつこに〈男ができた〉という噂を聞き付けた団地の母親たちは、その事実確認をしようとみつこの家を訪問し、その中の一人、折田夫人が太郎が3年前に蒸発した夫の部下であった飯沼太郎であることに気付く。折田夫人は太郎の現状を知り、みつこと太郎の妻である良子を引き合わせようと動き出すのである。

折田夫人の働き掛けで良子とみつこは会い、みつこは太郎がもと会社員で4年前に結婚したことや、3年前の野犬に襲われる事故をきっかけに良子のもとから消えたこと、現在はみつこの塾に通う扶希子の父である松原利夫と〈夜遊び〉をしていることを知らされる。蒸発してからも太郎の様子を把握していた良子は、以下のようにみつこに語っている。

(中略)そのうち、太郎は会社にも通勤しなくなったらしく、心配して折田氏が電話してきたので、「実は、蒸発したきり、行方がわからないんです」と良子は泣きながら訴えたが、悲しくて泣いたのではなく、これまで誰にも太郎がいなくなったことを話さなかったことが不審に思われて、いろいろ詰問されるのが嫌だったので、悲しみにくれて何も分からなくなった女の役を演じてみたまでのことで、本当の気持ちと言えば、悲しいというよりも、太郎への苛立ちが妬みのようなものになり、見るごとに逞しくなっていく太郎のからだに比べて、自分のからだの動きが、あまりにもろくて、ぎくしゃくして、魅力がないように思え、〈修行〉を始めたのだと言う。(pp.140-141)

「女の役を演じてみた」という良子の発言からは、団地の住人である一般的な社会的規範を持つ折田に対し、一般的にイメージされる女性像を演じることで厄介なことを回避しようとする心情が読み取れる。身体的な言及についても、良子の感性にも一般的な女性の感性とは差異があることを確認できるであろう。

そして、このような太郎の過去を知ったみつこの意識も変化を見せる。

結局、みつこは、太郎と利夫の〈夜遊び〉の内容も、良子の〈修行〉の内容も、よく分からなかったけれども、家へ帰ってから、これが、もと会社員なのか、と思って太郎を見ると、これまでの太郎を目の前にした時の恍惚感が薄らいでしまい、九月一日からはまた塾が始まったこともあって、みつこは毎日、午後から夕方にかけて、たくさんの子供たちを迎え入れて忙しく働き、太郎は、午後に家を出て、夜まで帰って来ないようになったが、その方

がみつこにとっては好都合で、日の光のもとで、太郎を見るのは、なんだかおぞましく、暗い家の中で、夜更けのことならばいいけれども、それ以外の太郎というものを、みつこは自分の生活の中から消してしまいたくなってきた。(pp.141-142)

太郎の闖入を強固に拒絶、抵抗することなく受入れ、犬のような太郎に生活リズムを合わせることを余儀なくされていたみつこであったが、太郎の過去を知ることでその「恍惚感」は薄らぎ、おぞましさを感ずるようになる。みつこは自分の目に犬のように映っていた神秘的な太郎の正体が平凡な人間、つまり男性であることに気付くことで、太郎に対する一種の拒否感を覚えるのである。自身の生活を乱すほどの太郎の強引さを疑うこともなく自然に受け入れてきたみつこの心境の変化とは、男性主導の社会風潮に無意識的であった女性が違和感を感じたことを示したものと捉えられるであろう。

多和田は北区の主婦たちに平均的な「主婦」の姿を投影し、それと対照的なみつこや良子を描くことで自らが抱いた性役割、つまりジェンダー的規範に対する違和感とそこからの解放を示したのである。ただし、それらがフェミニズムに立脚したものではないことは「スーパーマンみたいな」太郎が、かつてスマイルの刺繍のハンカチやキティちゃんの鉛筆を使用していたという記述から読み取れるであろう。女性の好むようなものを携帯し、みつこの家で家事をこなす太郎もまた、ジェンダー的規範にとらわれない人物なのである。

社会的な常識や規範は多くの人々が共に生活を営む上で必要な価値判断基準である。しかし、一方でそれらは他者に対する偏見や差別のような偏った意識へとつながる可能性を含んでいる。太郎に対する以前の職場の人々の反応は「あいつは、キティちゃんがついていない鉛筆は、使いたくないらしい」(p.125)というひやかしであった。ジェンダー的規範に従えば、折田夫婦のような性役割が明確に機能する団地の住人たちとは対照的に、みつこ、良子、そして太郎は異質な存在として映る。しかし、視点を変えると彼らは、ジェンダー的規範から解放された人々として捉えることも可能なのである。

3. 制度的結婚と家族の解体

前章では、みつこと太郎、良子がジェンダー的規範に拘束されない人物であることを明らかにした。明確な理由は想定できないが、太郎のような「技と力」を手に入れようと道場

での修行を始めた良子は、夫である太郎への未練よりも妬みに近い感情をもって、競うように身体的にも自身を高めようとしていた。そのような良子の態度からは男性である太郎と同等であろうとする強固な志向がうかがえるのである。また、みつこが塾で生計を立てている一方で、太郎が家事を行なうという南区での二人の生活は、サラリーマンの夫と主婦という性的な役割を保ちながら子供を育て暮らしを維持する北区の団地の人々とは対照的であり、一般的な男女の性役割が逆転したものであったと言える。このようにジェンダー的規範から解放されたみつこと太郎の行動が、結婚や家族という既成概念についても揺れ動かしていることが作中から読み取れるであろう。

作中での社会的規範としての北区の住人と比較すると、39歳の未婚で子供もないみつこが、家庭を築いていないという点で、一般的な結婚や家族という社会的な定型から逸脱していることは自明である。また、作中において昔話の「犬婿入り」を語るみつこだが、太郎との関係においても結婚を意識することはない。太郎においても良子という配偶者を持ちながら、みつこの同居生活を実行し松原利夫との関係も維持し、結婚という社会的な制度に縛られていない。そのような制度的な結婚に拘束されていないみつこと太郎が選択した結末は、それぞれの同行者と共に町を去ることであった。

前章で述べたように、太郎の正体、つまり太郎が人間の男性であるということを認識したことでジェンダーを意識するようになったみつこは、太郎に主導される自身の現状に違和感を持ち、太郎の存在を自分の生活から消したいと考えるようになっていた。それは女性としての自身の性への目覚めとも解釈でき、それはみつこの扶希子に対する母性へと変形していったのである。

扶希子に対しては、特別な気持が生まれ、夏休み前までは、みんなにいじめられる子だから守ってやろうと思っていただけなのが、今では、扶希子の髪の毛をとかしてやったり、爪を切ってやったり、一時間早く来るように言って、特別に勉強を見てやったりして、それでも、扶希子が他の子よりも勉強ができないと、自分のことのように腹を立てた。(p.142)

上記の引用文からは、みつこの心境の変化が態度として顕在するようになったことが確認できる。また、太郎も徐々に生活習慣を変え夜までみつこの家に帰らなくなっていた。太郎との関係をもつ利夫がゲイバーに通っているという噂が囁やかれるようになると、折田夫人はみつこに対し事実を突き止めるように促す。太郎を詮索することに興味を示さないみつこに対し、折田夫人は以下のように説得を試みる。

「つきとめるって、何をつきとめるんですか」

と言ってしまったが、この間からまともなことを言ってくれたことのないみつこにうんざりしていた折田さんはあきれて、

「だって、お宅の太郎さんが、もし……」

と言いかけたものの、太郎は、北村みつこのものではないのに、〈お宅の〉と言うのも変だし、みつこには太郎の交友関係を探る義務など全くないことに自分で気がついて、(中略)

「一度じっくり話し合われた方がいいんじゃないですか。飯沼君が良子さんのところにもどるのが一番ですけど、ふたりともやりなおす意志がないようすし、それならば飯沼君も良子さんとは正式に離婚して、先生のところにお婿さんに来ることだってできるんですから、それならそれで筋が通っていると思いますけれど、今のようなゲイバーとかは困るのでは……」(pp.148-149)

みつこに対する上記の言葉からは制度的結婚に固執し、それを受け入れさせようとする折田夫人の態度が読み取れる。一般的な家庭や社会的規範を表象する折田夫人にとって、太郎の幸せとはもとの妻である良子のもとへ戻るか、あるいは同居中のみつこと婚姻関係を結ぶことで、選択肢は離婚か結婚に限られるのである。それに相反するように小説の結末では、みつこは塾の生徒である扶希子と、太郎は扶希子の父親である松原利夫と町を出て行く。

親子である利夫と扶希子は、数年前に病気で扶希子の母を亡くして以来、二人で生活していたが、結果として別の暮らしをすることになるのである。このことは血縁上の親子関係が断たれることを意味するが、これは必ずしも家族の離散だとは言いきれない。太郎が同性の利夫をパートナーとして選択したことは同性婚として、みつこが扶希子を引受けたことは養親子関係として捉えることも可能である。この二つの関係の前者は現在も日本では法的に認められていないものであり、後者は養子縁組の制度として認められているが、未婚女性が里親になることは稀れであるといえる。このように太郎とみつこの決断を解釈すると、それらはさまざまな結婚や家族の様態を許容することのあらわれとも捉えられ、現行の制度にとらわれない新たな家族関係の構築とも考えられる。つまり、太郎とみつこの結末での行動は、従来の結婚と家族の解体をあらわしていると言えるのである。それは従来の日本のあるべき結婚像や家族像、あるいは制度的結婚や家族を解体することだと換言できるであろう。

折田は小説の結末について「物語は、様々な「揺れ」を包摂したまま、あらゆる円環の中に閉じこめられる」と述べ、折田の家に届いたみつこからの電報を読者自らが物語を

解釈し伝えなければならないというメッセージとして捉えている。15)作中で、みつこは太郎と良子に「電報、届きましたか」と問われるが、最後までみつこの手元に電報が届くことはなかった。しかし、みつこは町を出ることを電報で折田家に伝えるのである。

翌日、折田家にみつこから電報が届き、そこには、フキコヲツレテヨニゲシマスオゲンキデ、と書かれていた。(p.153)

物語の最後に、みつこの電報は確実に折田のもとに届いた。しかも夜逃げならば、誰にも知らせずに出ていくべきだが、みつこはわざわざ電報で伝えているのである。太郎と良子の語る「電報」とみつこの電報を小説の中で同じ機能としてみなせるかは明言できない。しかし、みつこの電報は折田に届き、その内容が伝わった点において、みつこの一つの宣言を明示したものと受け止められるのである。それは、みつこ自身が扶希子とともに新しい家族を築くことの宣言だと言えるであろう。

昔話の「犬婿入り」は、既成の結婚や家族に対する概念やかたち、前章で述べたジェンダー的規範も解体する物語であると言えよう。その意外性に作者の多和田が触発されたことは、先に述べた通りである。

「君たちは動物たちと結婚する話と言えば〈つる女房〉しか知らないかもしれないけれど、〈犬婿入り〉っていうお話もあるのよ」(p.92)

みつこは塾の子供たちに〈犬婿入り〉の存在を知らせ、語る。子供たちと同様、日本の民話における異類婚姻譚と言えば「つるの嫁入り」とも呼ばれる「つる女房」を思い浮かべるのが一般的な読者に、多和田はみつこを通し「犬婿入り」の民話を伝えようとする。

「つる女房」に聞きなれていた読者にとって、犬がお姫様の尻を舐め結婚する物語は、衝撃的であり異質なものとして映るしかない。しかし、多和田にとってのそれは社会的規範からの解放の表象のように読めたのであろう。みつこと太郎の行動からは、多和田の着目点が結婚や家族にも多様性が求められる日本社会に向けられていたことがわかるのである。

15) 前掲書、疋田雅昭(2006)、p.170。「物語は、様々な「揺れ」を包摂したまま、あらゆる円環の中に閉じこめられる。届いたことのない「電報」をきっかけにした物語は、果実に届いた「電報」で幕を閉じる。そこに残ったのは文字だけである。短い文字の空白は、我々に言い続けるだろう。「解釈せよ」そして「伝えよ」と」

4. 禁忌とされる性的マイノリティ

みつこと太郎たちが町を去った後、みつこの住んでいた家は壊されアパートが建つことになり、子供たちは新しい塾に通い始める。物語の舞台に変化は訪れたが、物語そのものは変わらずに引き継がれるかたちで小説は結末を迎える。ここであらためて考えさせられるのは、みつこと太郎の決断である。前章で考察した通り、二人の選択した結末は従来の制度的結婚や家族を解体するものであり、みつこが折田家に送った電報はみつこの扶希子との新しい生活への宣言として結論づけた。しかし、新しい家族を持つとした彼らが、なぜ町を去らなければならなかったのだろうか。

ある週末、家族と外出し帰宅途中であった折田は、偶然、上野駅で身を寄せあって立っている太郎と利夫を見掛ける。彼らを目にした折田は、以下のような反応を見せる。

「飯沼君」

と大声で叫ぶと、太郎はすばやく折田氏の姿を見つけ、うろたえるでもなく、丁寧に頭を下げて挨拶し、

「どこへ行くんだ」

と折田氏が更に大きな声で叫ぶと、

「お世話になりました」

(中略)荷物を妻に預けて、折田氏は階段を駆け降り、向かいのホームへと急いだが、しばらくすると息を切らしてもどってきて、

「逃げられた。警察に電話しよう」

と言ったが、妻にとめられて考えてみると、飯沼太郎が松原利夫と旅行に出たからといって警察に追われる理由は全くなく、(後略) (pp.151-152)

身を寄せ合う二人の姿や、良子の「夫の男のパートナー」という発言、周囲のゲイバーに通っているという噂話から判断すると、太郎と利夫の関係は同性カップルと推測できる。そして、このことが折田に上記のような行動をとらせたと考えられるのである。太郎と利夫を見つけた折田が警察に電話をかけようとしたこの咄嗟の行動は、おそらく無意識的かつ反射的なものであり、ここに折田の本心を察することができるであろう。二人が旅行に出ることが罪に問われることではないと自覚していながらも折田が警察に連絡をしようとした根底には、二人の関係そのものを社会的な罪や悪と捉える認識があったものと捉えられる。つまり、折田が同性愛という二人

のセクシュアリティを禁忌として捉えていたと推測できるのである。また、折田夫人にも同性愛者の太郎たちに対する否定的な認識があったことは「でも、つきとめておいた方がいいんじゃないやありませんか。エイズなども心配ですし」(p.148)という、みつこに発せられた短絡的な言葉からも確認できる。社会的規範の表象のともいえる折田夫婦の太郎らに向けられた視線とは、同性愛者などの性的マイノリティの人々に向けられた否定的な日本社会の視線なのである。

太郎と利夫だけでなく、作中ではみつこについても同性愛者を思わせる記述がある。その正体を知ったことで太郎に対する「恍惚感」が薄れるのと同時に、みつこは扶希子に新たな感情を抱きはじめる。

なんだか、いつも、ねばつくような感じのする手のひらで、時々、耳をいじったり、もの想いにふけったりしながら、ぐずぐず箸を動かしている利発とは言えない扶希子を見ていると、みつこは、よく、苛立ちと似た強い愛情が湧き起こってきて、胸が苦しくなり、早く太郎が出かけていってしまえばいいのに、そうすれば、自分と扶希子はふたりきりになれるのに、と思うことさえあったが、ふたりきりになったから何をするというのでもなく、むしろ、みつこが無理に本を読んでやろうとして、扶希子が嫌がって、喧嘩になることの方が多かったが、みつこが、ボタンがちぎれそうになった扶希子のブラウスを脱がして、そのボタンを縫い付けてやったりすると、扶希子は裸で隣に坐って、じっと、みつこの指の動きを見つめていて、そのうちみつこの肩にもたれかかってくることもあり、(後略) (p.146)

上記の光景では、みつこの扶希子への愛情が単なる母性とは異なるものとして映る。みつこの性的観念は不明瞭に描かれているが、二人のエロチックな描写からは、同性愛的なセクシュアリティが感じられるといえるであろう。「胸が苦しくなる」ほどの「強い愛情」や扶希子と「ふたりきり」になりたいというみつこの気持ちは、母性よりも恋愛感情に近いものとして捉えられる。前章では、扶希子へのみつこの愛情を母性として論じたが、それは両義的に同性愛としてのセクシュアリティとして捉えることも可能であろう。また、みつこや太郎たちの旅立ちにも両義性があると考えられる。そこには彼らの同性愛者としてのセクシュアリティが関わっているものと想定できるであろう。

小説の中でのみつこと太郎の登場から結末までの一連の流れを見ると、それは昔話の「つる女房」のパターンに当てはめられる。小澤俊夫の日本の異類婚姻譚の分類によると、「つる女房」は「来訪—結婚—正体露見—退去」¹⁶⁾というパターンに分られる。

16) 小澤俊夫(2014)『昔話のコスモロジー—ひとと動物との婚姻譚—』小澤昔話研究所、pp.209-253参照。本書

「つる女房」では、人間である夫が禁忌とされていた妻の正体を覗き見し知ってしまったために、妻であったつるが夫のもとから立ち去る。これを「犬婿入り」に重ね合わせると、出自が明らかでないみつことも太郎も唐突に物語にあらわれ同居を始め、そして自らの正体、つまりセクシュアリティが周囲の人々に知られたために町を離れたと解釈できる。「犬婿入り」に描かれたみつこと太郎の「正体露見―退去」という構図は、同性愛者、つまり性的マイノリティの人々の社会での在り方を顕在化しているのである。また、上野千鶴子は「「セクシュアリティの近代」を越えて」(2009)の中で、性的マイノリティの人々のアイデンティティ探究が新たな展開を迎えたのは1990年代以降だとし、この頃から、それまで「性別二元制」という排他的なカテゴリー化によって生きづらさを感じていた人々の証言が理解されるようになったと語っている。17)このような社会背景の中、多和田は、みつこたちの「退去」を通し、日本社会において自身のセクシュアリティが公になることで生きづらくなる人々の姿を描き出した。そして、そこには折田夫婦の態度から読み取れるように、性的マイノリティを禁忌とする社会意識が同時に描かれているのである。

既存の結婚や家族を解体するみつこと太郎はセクシュアリティにおいても、社会的なマイノリティであった。彼らの結末には、建設的な意志が確認できる反面、両義的に町を出るしかなかった社会的な背景があったと考えられるのである。

小説の冒頭では〈キタムラ塾〉の電信柱の貼り紙について描写されていた。ピンク色のマジックペンで書かれた文字が雨でにじみ、半分しか読めないその貼り紙は、剥がれ落ちそうと思われながらもしぶとくしがみついていた。この貼り紙から始まった物語は、みつこの電報と、みつこの家に貼られた貼り紙で幕を閉じる。みつこの電報は、みつこの解放とそれに対する意思表示であったとも言えるが、みつこの家の貼り紙にはピンク色のマジックペンで〈キタムラ塾は閉鎖されました〉(p.152)と書かれてあった。「閉鎖しました」ではなく受動的な「閉鎖されました」という表現で書かれているこの言葉には、自身の生き方を貫きながらも

にて小沢は、異類婚姻譚から見た日本昔話の特質についてまとめている。動物が人間の文化の世界に訪れ人間と結婚する異類婚姻譚について、その後の結末の違いから次のような3つのパターンに分類している。1. 「来訪-結婚-正体露見-退去」(「つる女房」「魚女房」など) 2. 「来訪-結婚-正体露見-追放」(「蛙女房」) 3. 「来訪-結婚-殺害」(「猿婿入り」「蛇婿入り」)

17) 上野千鶴子(2009)「「セクシュアリティの近代」を越えて」『新編 日本のフェミニズム6 セクシュアリティ』、岩波書店、pp.32-33参考。上野は本論にて、1990年代以降にアメリカにおけるクィア・スタディズの影響のもとに多様なセクシュアリティのあり方が登場し、TG(トランスジェンダー)、TS(トランスセクシュアル)、インターセックスといわれる人々のアイデンティティとセクシュアリティの探究が急速に展開を遂げたとしている。また、TGやTSも程度の差や多様性があること、ジェンダーがセクシュアリティと対応していないことなどを指摘し、ジェンダーやセクシュアリティを男と女のいずれかしか許さない排他的なカテゴリー化を行なう「性別二元制」のもとで彼らが生きづらされるのが「問題」だと述べている。

外的要因により塾を閉鎖し、町を出て行かなければならなかったみつこの心情がうかがえるのである。この貼り紙からも、みつこと太郎の決断における、個人の解放とそれに対する否定的な社会の視線という両義性が裏付けられるであろう。

5. おわりに

本稿では多和田葉子の「犬婿入り」(1992)を主人公をはじめとする登場人物の相互関係を通し、小説の中の異質性を作者の現代日本社会に対する着目点と連続させ考察を行なった。中心的な登場人物であるみつこと太郎が、ジェンダー的規範から解放されている人物であることを指摘し、それらが制度的な結婚と家族を解体しようとするものであることも確認した。また、みつこと太郎が性的マイノリティであり、それを禁忌とする社会的な視線も明らかにした。

作者は高度経済成長期に開発された多摩地区を舞台に、そこに住む人々が日本社会の典型、あるいは規範とされている点に着目し、それらに拘束されない人々を描くことで自らの社会に対する違和感を描き出したのである。多和田も居住していた東京多摩地区は、1950年代後半からニュータウンとして団地建設が進められ、外部から多くの人々が流入した町である。新たに住み始めた人々によってコミュニティは形成され、新しい社会がつけられてきた。そのような多摩地区が、1960年代頃には日本社会全体の生活モデル、あるいは指標や規範となっていた。多和田は日本社会全体の指標となった多摩地区をモデルにした北区と対照的な南区、そしてそこに住む人々を通し、社会的規範と個人の在り方に対する自身の視線を映し出したのである。

出自も不明で、社会的な分類に帰属しない39歳の未婚のみつこは、ジェンダー的規範や制度的結婚、セクシュアリティの観念において拘束されず、社会的規範から解放された人物として描かれていた。あらゆる面で奔放に見えたみつこは自身の生き方を貫く人物であったともいえるが、結果として町を出て行く選択をした。本来自由であるべきものが制度や観念を含めた社会的規範によって固定化されている社会を、作者の多和田は違和感をもって見つめ、作品を通しそれらの解体を試みたのであろう。作中における不明瞭で異質と思われる登場人物らは、多和田にとっては異質なものではなく個人の在り方なのである。社会的指標や規範によって区別、分類し帰属させなければ済まない社会において、みつこや太郎たちは異質な存在となる。先行研究で論じられてきた作品の異質性は、受け手の無意識的な規範によって構築されているともいえるであろう。

【参考文献】

- 泉谷瞬(2012)「教化される感覚—多和田葉子「犬婿入り」論—」『昭和文学研究(65)』昭和文学会編集委員会編、pp.86-92.
- 上野千鶴子(2009)「「セクシュアリティの近代」を越えて」『新編 日本のフェミニズム6 セクシュアリティ』、岩波書店、pp.32-33.
- 岡部隆志(2004)「多和田葉子『犬婿入り』論—消費される民話—」『國學院雑誌105(11)』國學院大学、p.506.
- 小澤俊夫(2014)『昔話のコスモロジー—ひとと動物との婚姻譚—』小澤昔話研究所、pp.209-253.
- 鹿野政直(2004)『現代日本女性史—フェミニズムを軸として』有斐閣、pp.32-35.
- 川村二郎・山本道子・三浦雅士(1993)「創作合評205「犬婿入り」多和田葉子」『群像』48(1)講談社、pp.536-542.
- 多和田葉子(1993A)『犬婿入り』講談社、p.92、pp.96-99、pp.112-113、pp.140-142、p.146、pp.148-149、pp.151-152、p.157.
- _____ (1993B)「〈生い立ち〉という虚構」『文學界』47(3)、文藝春秋、pp.32-34.
- _____ (1993C)「「犬婿入り」について」『本』18(5)、講談社、pp.6-7. (DOI: <http://dx.doi.org/10.11501/3468167>)
- 長谷川美緒(2018)「テキストを揺さぶる言葉—多和田葉子「犬婿入り」における異質性について—」『早稲田現代文芸研究』早稲田文芸・ジャーナリズム学会、pp.145-155.
- 疋田雅昭(2006)「欲望する主婦たち もしくは 抑圧される子供たち—多和田葉子『犬婿入り』をめぐる—」『立教大学日本文学』(97)立教大学日本文学会、pp.163-164、p.170.

논문 투고 일자 : 2019. 12. 30.
논문 심사 일자 : 2020. 01. 28.
게재 확정 일자 : 2020. 01. 30.

<要旨>

多和田葉子「犬婿入り」論
-ジェンダー的規範の解体を中心に-

松崎美恵子

本稿では多和田葉子の「犬婿入り」(1992)を主人公をはじめとする登場人物の相互関係を通し、小説の中の異質性を作者の現代日本社会に対する着目点と連続させ考察を行なった。中心的な登場人物であるみつこと太郎が、ジェンダー的規範から解放されている人物であることを指摘し、それらが制度的な結婚と家族を解体しようとするものであることも確認した。また、みつこと太郎が性的マイノリティである可能性を指摘し、それを禁忌とする社会的な視線も明らかにした。

作者は高度経済成長期に開発された多摩地区を舞台に、そこに住む人々が日本社会の典型、あるいは規範とされている点に着目し、それらに拘束されない人々を描くことで自らの社会に対する違和感を描き出したのである。先行研究で論じられてきた作品の異質性は、受け手の無意識的な規範によって構築されているともいえるであろう。

A Study of “The Bridegroom Was a Dog” by Yoko Tawada
-Focusing on Liberation from Gender Norms-

Mieko, MATSUZAKI

This paper discusses the heterogeneity illustrated in “The Bridegroom Was a Dog (Inumukoiri)”(1992)by Yoko Tawada, by connecting with her viewpoint on cotemporary Japanese society. It is pointed out that the central characters, Mitsuko and Taro are described as being liberated from gender norms and it is also confirmed that such liberation will break down the marriage and family system. Moreover, the social taboo of sexual minorities like Mitsuko and Taro is revealed.

Focusing on the fact that the people living in Tama area which developed during the high economic growth period of Japan, were considered to be typical examples or norms, the author of this novel expresses her discomfort with such a society by describing people who are not bound by such norms. The heterogeneity in this novel discussed in preceding studies may be considered to have been established by the non-conscious norms of its readers.